あがたの杜

http://www.agatajinjya.com
第18号 平成27年4月吉日
発行 あがた神社木の花会

縣の森 折々

縣神社総代 小永井 征 也

縣神社の境内に樹齢500年を超える巨大な椋の樹が今もご神木として参拝者を迎えてくれる。この辺りは昔縣の森とよばれ巨木の繁る神域で、その中に蒼然としながらなお毅然とした風格の古社がある。縣神社の本殿である。木花開耶姫命を御祭神として奉祀し、結婚、安産の守護神としてまた商売繁盛、家内安全を祈願してお参りの人が絶えない。

1月5日は初あがたと呼ばれ、以前は北河内の講社からの信者のお参りも多く、赤褌に鈴をつけ米俵を担ぎながら初参りをしたという。今はこれらの姿は見られないが、これもかなり古くから行われて来た「初あがた子供神輿」が境内を沸かす。菟道校区子供会連合会の方々の支援をいただき、菟道小学校の子供達がハッピ姿で子供神輿を車に乗せて街中を練り歩く。シシ舞も太鼓もすべて子供達の活躍である。冬冷、寒風の中を元気な声で街を歩く姿は、いつ見ても勇ましく頼もしくそして誇らしげ。

6月5日は「あがた祭」。この祭事は神の依代(よりしろ)たる「梵天」を直接動かすので、深夜暗黒の中で行うという太古の尊厳な様式を今なお留めている。当日朝御饌ノ儀、夕方の夕御饌ノ儀を斎行し、夜になって深夜本殿で「梵天」に「神移し」が行われ、御祭神の移られた「梵天」は若い元気な信者数十人の肩に担がれ、境内を出て街路へ。この間全ての明かりは消され、暗闇の中で「ブン廻し」など数々のデモが行われ、観衆は大歓声をあげて見守る。やがて御祭神は本殿へ着御され、熱気の中で梵天渡御を終える。

次いで6月8日は大幣神事。これは縣神社の直接の祭事ではなく、代々縣神社が取り仕切るが、平安朝以来の道饗祭である。即ち諸々の災い、疫病が土地に入らないよう、安寧と静謐を祈る祭事。猿田彦面、大幣、騎馬神人、供奉等が市内を巡行し町々の平安を祈る。馬馳せのあと大幣殿から大幣を引きずりながら宇治橋まで走り宇治川に流すが、その後を騎馬神人が追って合流して神事を修める。

わがたのむ県の宮のます鏡　くもらぬ影をあふぎてぞまつ　中原師光朝臣

蛙なく県の井戸に春くれて　散りやしぬらむ山吹の花　後鳥羽院御製（続後撰和歌集）

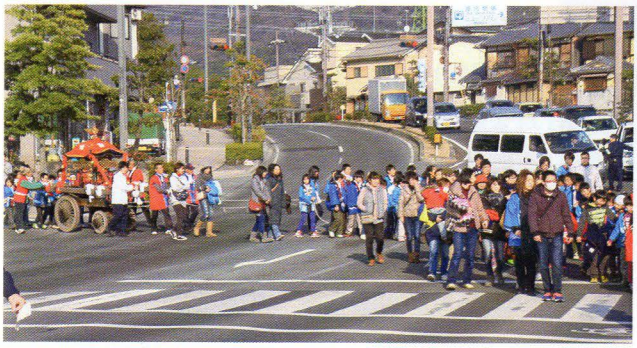
天孫天津彦彦火瓊々杵尊(あまつひこひこほのににぎのみこと)の妃、木花開耶姫命は当地の地主神であり、太古の県の守護神でもあった。そして今もなおこの地の守り神であり、新たに生まれくる子供達の命が恙なくこの世に永らえられるよう力を下さる神様でもある。

子供神輿に寄せて

この笛ふくや会　山　本　利　弘

毎年、祭りに参加させて頂くため、年末年始は体調管理に気を配るようになりました。

寒い時期と休みが重なり炬燵にテレビが欠かせませんが、子供達の掛け声に励まされて、獅子舞のお供で町の商店や各御家庭での挨拶が出来ますので、新年のスタートを感じます。



又、普段は決して出来ない通りでの鳴り物の演奏も面白くなって来ました。子供たちや私達も最初は恥ずかしいのですが、段々と慣れて楽しくなって行きます。かつて我が家の子供達も参加させていただき、今こうして老年に向かっていく私が参加出来るのも、意義深い伝統行事だと思っています。これからも又、参加できますようにと願っております。

こしずつ楽しくなってきました。いろいろなお店を回っていると回りの人からも「もう一回おどって～」や、「上手ですね～」などの声が聞こえてきたので私はとてもうれしかったです。

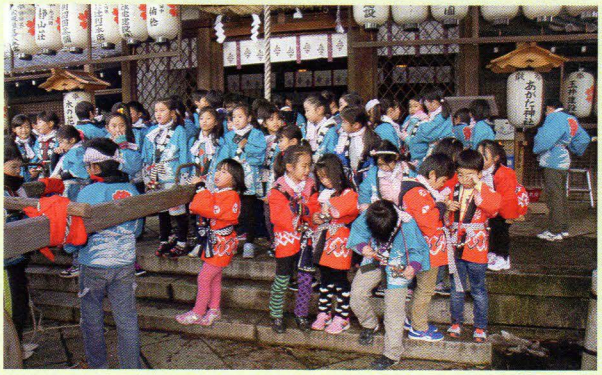
次に獅子舞をやる人はきんちょうせずに自信を持って取り組んでほしいと思っています。頑張って下さい。おうえんしています。

松田　恭河

ぼくは、この６年間、こどもみこしをしてきましたが、６年生の時がすごく楽しかったし、心に残りました。

１年生の時は初めてで、まず、ゴールできるかがしんぱいでした。しかし今ではラクラクにゴールできます。それは６年間、みこしをしてきたからだと思いました。

そしてさいごのみこしは太こをできてすごくうれしいです。年にたった１度しかできないからです。太こは、リズムを取るのがすごくむずかしかったけれど、あとからリズムがとれるようになりうれしかったです。



ぼくは１年～６年生までの、みこしを絶対にわすれません。

俣野　広弥

今回が最後の初あがたでした。今回で、最初で最後のししまいでした。失敗したらあかんという気持ちできん張していたけど、やっていると、そのきん張もなくなり、ししまいでおどっていることが楽しくなるくらいでした。

後からは、失敗したらあかんとは思わず、見てくれている人を楽しませたいという思いが、でてきました。最後には、おどっているこっちまで、楽しくなってきました。

僕は、このししまいをしたということを、一生忘れないと思います。また、こういうきかいが、またいつかあったとしたら、やりたいです。

初あがた祭によせて

初あがた祭子供神輿会　山　田　博　司

初あがた子供獅子舞いの担当をさせていただき早や５年目です。私が担当するきっかけは、町内の先輩から祭を手伝ってくれないかと誘われ、手ほどきを受けながら一日中汗だくで頑張り、爽やかな達成感を持つことが出来ました。これが先輩からの引き継ぎで、以降、毎年獅子舞の担当となり、中宇治地区のお店やご家庭を訪問し、「一舞」をさせていただいています。

訪問を待ちわびているご家庭や新規店も増え、盛り上がりを感じています。想うに、私は仕事で各地に住み各地のお祭を見てきましたが、参加したことはなく、この地に来て参加することの楽しさを実感しました。この地を盛り上げるのはお祭りで、初あがた祭が年代を問わず、みんなが楽しむお祭りになる様、頑張りたいと思います。

初あがた　子供神輿に参加して（菟道校のみなさん）

木村　愛那

私は、神輿を引っ張ったのは３回目で、今年が一番心に残りました。今年で最後だと思うと、さみしかったからです。

３回目で、どんなことをするのかは、分かっていたけど、車が通る道路で、神輿を引っ張るには大変だなぁと思いました。大勢の人数がいても、神輿は重たかったので、たくさんの力がいることを学びました。長い道を、みんなで引っ張るのは、すごく疲れました。特に、坂でした。

でも、色々な人に「がんばれ！」と言われると、すごくうれしかったです。なので、がんばれました。私は、最後の初縣が、良い初縣になって良かったです。

川上　流空

ぼくは、この行事にほとんど毎年参加してきました。ぼくは、この初県のみこしでいままでなかよかった友達も、いままであまりしゃべった事なかった友達ともならんでわいわいしゃべりながら引いていったおかげで、いままでなかよかった友達とはもっとなかよくなって、いままであんまりしゃべった事がなかった人とは、そこからよくしゃべるようにみんなとなかよくなれました。

この行事は、江戸時代から数百年続いているらしく、けがれを知らない子供達はもっとも神に近い存在であるという信仰からきているらしいので、ぼくたちもけがれを知らない子供のままでいられるようにがんばりたいです。

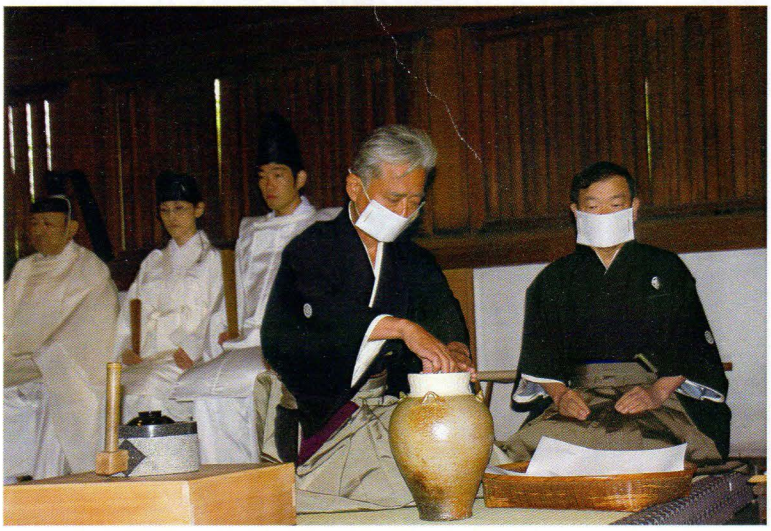
辻　桃花

私は獅子舞をやりました。獅子舞はとても動きが激しいので出来るのかとても心配だったけど、分かりやすく教えてくれたので少し安心しました。そして少しだけ練習したらすぐに本番がやってきました。

まず１家目を終えたときは少しだけ出来なかったところもあったけど５家目ぐらいになるとす

献茶祭茶壺

縣神社総代　堀　井　長太郎



11月5日、深まりゆく秋、お茶の味も一段と美味しくなるこの日、縣神社の「茶壷口切式並びに献茶祭」が厳かに行われます。茶道の世界では口切の茶事は「茶の正月」とも言われ、茶の新年の始まりを祝う大切な茶事です。その年摘まれた新茶が夏を越し、香りの新鮮さが消え、一段と味と香りに深みを増した茶がこの時期に使われ始めるには理に叶ったことであります。

その茶の保存に重要な役目を果たすのが茶壷です。従来、茶壷は「信楽焼」が一番良いと言われ、江戸時代徳川将軍家に宇治より献上された「お茶壷道中」には必ず「信楽焼」の茶壷が用いられたものでした。「火廼要慎」のお札で有名な京都市の西北部に位置する愛宕神社の坊に、碾茶が詰められた茶壷を暑さを避け、百有余日預けられた後、江戸に出発した、とも言われております。信楽の茶壷は外からの湿気を防ぎ、中に詰められた茶葉の湿気を吸い取り、保存にはもってこいの性格の陶土であったと言われております。正式の献上茶壷は「腰白茶壷」と言われ、上部が茶褐色の鉄釉, 下部が並白釉の掛け分けで内部は無釉で「四耳壺」と決まりが有りました。

縣神社の茶壷はそのような茶褐色の茶壷ではありませんが、もうかれこれ半世紀以上前、信楽の名工三代高橋楽斎の作品です。伝わるところによりますと、当神社に崇敬が深かった信楽焼名店店主により、当神社に二壺ご寄進され、その内の一壺が今日まで口切式に使用されております。その形、上部は柔らかく張り、下部へは優雅に流れるような曲線で、細縦長の見事な形を造形しております。外側を信楽焼でも珍重される独特のビードロとよばれる青緑に発色した自然釉の筋が流れ、見事な景色をつくり、楽斎、渾身の力作でまさしく信楽茶壷の名品です。

さらにこの茶壷は毎年口切に使われるため、和紙が何重にも分厚く重なり、半世紀分の勲章の様に誇らしく口の周りを覆っています。

このような由緒ある名品の茶壷に抱かれた碾茶をご神前で取り出し、石臼で挽き始め芳醇な香りが漂う時、相変わらず同じことが出来る喜びを感じる瞬間でもあります。